

1 毛筆指導を硬筆に生かす工夫

元静岡市立服織小学校校長

松本健作

今号より、小学校『書写』教科書編集委員の松本健作先生に、硬筆指導について、三回にわたって連載をしていただきます。松本先生は、子どもたちが意欲的に書写に取り組めるようさまざまな工夫をされています。

はじめに

小学校の硬筆指導は、鉛筆が主流ですが、フェルトペン、ボールペンなど硬筆の筆記具は多種多様です。今回から始める「硬筆指導の工夫」では、学校生活や日常でいちばん多く使用している鉛筆を核にして、学習指導要領に示されている筆記具を選ぶ活動も取り入れながら(時には毛筆も)、硬筆の指導法を考えていきます。

指導は形から入る、ということをよく聞きますが、姿勢のことや鉛筆の持ち方ばかりを厳しく指導しても、なかなか身

につくものではありません。本連載では、子どもに興味をもたせる授業を展開すること、正しく文字を書くこととする意識を高め、姿勢・執筆の改善につなげることを目指します。

今回は三年生を例に、「毛筆指導を硬筆に生かす工夫」についてお伝えします。学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」にも示されているとおり、「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導」すべきです。しかし実際は、今日は毛筆、次週は硬筆というように、硬毛を分断した指導をしていることが少なくありません。そこで今回は、毛筆と硬筆を関連させて

学習することで、左右の払いを習得していく事例を紹介します。毛筆が始まる三年生のときから、硬毛の関連をしつかり図っていきましょう。

事例 ①「王さまのおひげ」で左右の払いを習得する活動

一時間の授業の中で、毛筆と硬筆を同時に指導する事例です。毛筆と硬筆の切り替えが素早くできるよう、ここでは、毛筆・硬筆両用の両面下敷き(毛筆用下敷きの裏が硬筆用になっているもの)を

使用していますが、両面下敷きが入手できない場合は、毛筆用の下敷きの下に、硬筆用の下敷きを重ねるという方法でも実践可能です。

(1)黒板に「王さまのおひげ」と書きます。児童は、何が始まるのだろうかと思議そんな顔をし、授業への期待感を膨らませ、教師の次なる言葉や板書に注目します。

(2)次に、教科書22・23ページ(課題文字「木」)を開きます。「王さまのおひげ」を書くことで、「木」の左右の払いの書き方を学習することが本時の目標であることを伝えます。

硬筆用の下敷きを用意させ、書写の準備

運動として、ワークシート①を使い、鉛筆のひと筆書きをさせます(※1)。その際、左右のひげの先端がとがっていることを強調しておきます。

(3)ワークシート②(※2)の左上のますに、鉛筆で「木」を書きます。左右の払いの先がとがっていることを確かめるため、この後、毛筆で学んでいくことを伝えまます。そして、ワークシート③(※3)を配ります(下敷きは毛筆用に替える)。

(4)「木」の左右の払いは、王様のおひげに似ています。今度は毛筆(小筆)で、二人の王様に似合ったおひげを書いてあげましょう」と投げかけて、小筆でひげ

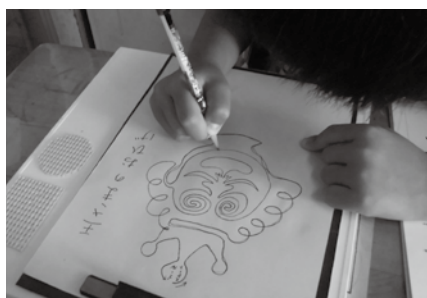
を書かせて、左右の払いの感覚をつかませます。

ひげの書き方の例(※4)にあるように、くねったひげでもOKということで自由に書かせます。書いたら、隣どうしでひげの先端がとがっているか確認し合い、相互に批評します。

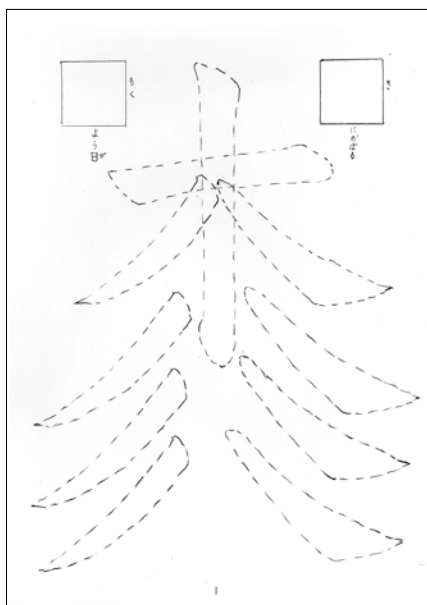


▲※4 ひげの書き方の例

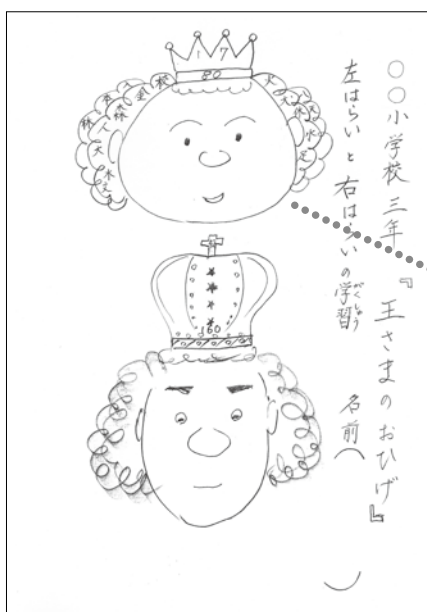
第1学年の配当漢字80字のうち、左右の払いを含む漢字17字が、王様の髪の中の毛の中に書かれている。楽しみながら、既習漢字を意識させる工夫。



▲※1 ワークシート①に、鉛筆でひと筆書きをする児童。



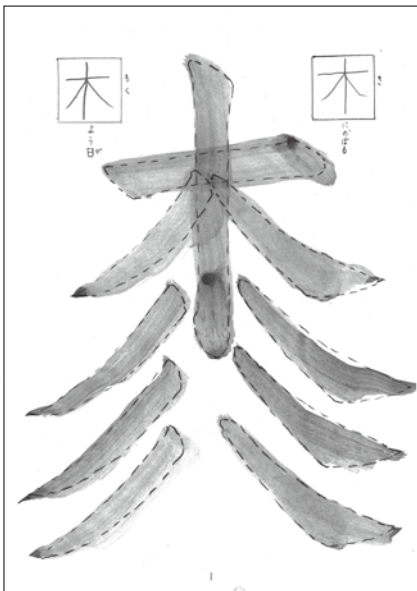
▲※2 ワークシート②



▲※3 ワークシート③

1951年静岡県生まれ。静岡県書写道振興会副理事長、前静岡県書写道教育研究会長。県内の小・中学校や書道教室で講師を務める。光村図書小学校「書写」教科書編集委員。





▲※8 左上の「木」は、授業の最初に書いたもの。右上の「木」は、まとめ書き。左上の「木」に比べて、右上の「木」は払いが意識されている。

※評価は、(7)の【基準】に沿って、授業の終わりに、本人がするか、隣席の友達どうしで行うと効率的です。

※評価の基準はつきりしていれば、教師が評価するよりも、児童どうしの評価のほうが関心度は高まります。

(9)下敷きを硬筆用に替えて、まとめ書きをします。ワークシート②の右上のますに鉛筆で「木」と書き、最初に書いたもの(左上のます)と比べながら、左右の払いの違いが表現されているか確かめます(※8)。

※時間があれば、左右の払いが連続する漢字を練習したり、プリントにして家で復習したりすると定着度は高まります。

事例② ひと筆書きで、筆記具(鉛筆・小筆)に慣れる活動

国語科に位置づけられる書写は、技能教科の一つでもあります。道具に数多く触れ、道具を使いこなし、道具を正しく扱うことに慣れた者が上達の道を歩んでいきます。児童が無理なく道具を使いこなせるようにするために、次のような活動を行います。

(1)ワークシート⑤に、鉛筆でひと筆書きをします。その際、かかった時間を計ります。

(2)小筆に持ち替え、(1)で使用した用紙に墨でひと筆書きをします。

※(1)と(2)の所要時間を比較すると、ほとんどの児童が鉛筆よりも小筆のときのほうが



▲※9 ワークシート⑤に、鉛筆と小筆でひと筆書きしたもの。



▲※10 筆の軸がしっかり立っている。

この活動で注目したいことは、小筆を素早く動かそうとすると、垂直に近い角度で筆を握るようになっていくことです。小筆の穂先で線をたどっていくので、自然に筆の軸が立ってくるわけです(※10)。

姿勢や執筆の正しいあり方を身につけるには、正しい状態をより長い時間維持することです。とかく、文字の組み立て指導や基本点画の書き方ばかりが課題視されてしまう書写ですが、技能習得のいちばんの基本は、道具(鉛筆や筆)に慣れ、一体感をもって学習に臨むことです。三年生になり、硬筆と毛筆を利用して文字を習得していくこの段階では、今まで以上に姿勢や執筆にこだわった指導が重要になります。低学年のときよりも骨格、体格がしっかりしてきた学齢期だからこそその重点指導です。

が早く終了します(※9)。

(5)王様のおひげの書き方を全員で確認するために、数名の児童に黒板の前に出てもらい、水書板で再現させます。

左のひげも右のひげも、止まることなくササッスーッと書くこと、先端をとがらせて書くことができているかを確かめたら、ワークシート②を使用して、払いの書き方を練習します(※5)。

(6)教科書で、〈左払い〉〈右払い〉という用語を確かめ、左右の払いの書き方の違いを確認します。

〈左払い〉

- ・途中で止まらない。



▲※5 ワークシート②を使用して、払いの練習をする児童。

・なめらかにサッと書く。

・始筆からだんだん筆圧をなくして細くなっていく。

〈右払い〉

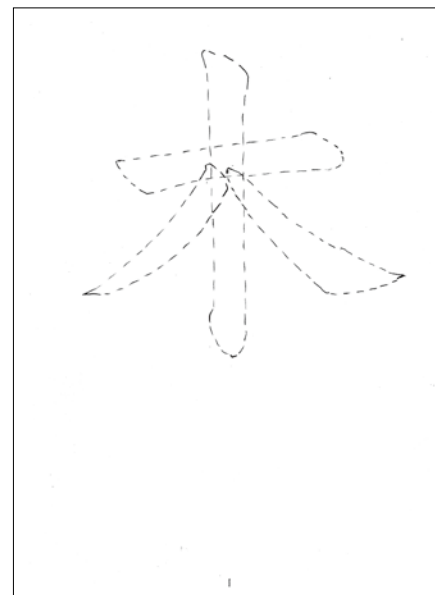
- ・徐々に筆圧を加える。
- ・第一画の横画の終筆の真下あたりでいったん止まり、その後徐々に力を抜いて右の方向に払うように筆を運ぶ。

(7)毛筆で「木」を書くときの基準(気をつけること)を話し合いで確かめます。

※授業終盤のまとめ書きの評価は、この基準をもとにするので、児童にも分かりやすい表現にします。

【基準】

①左右の払いは、先端を細くする。



▲※6 ワークシート④



▲※7 ワークシート④を使用した後、半紙に「木」を書く。

②左右の払いは、筆圧に注意しながら払いの方向に気をつけて書く。

③右払いは、軽く止めてから右の方向に払う。

(8)基準①②③に気をつけて「木」を毛筆で書きます。

- ・かご文字になっている「木」(ワークシート④(※6))に、左右の払いが点線の枠の中に入るよう、筆圧に注意しながら書きます。
- ・ワークシート④を使用した後、半紙に一〜二枚書いたら(※7)、前後左右の友達と相互に批評し合い、次に書くときの留意点にします。